

文学的読解と第2言語習得の関係についての理論的考察

—情意面からの考察—

広島大学大学院教育学研究科院生 西原 貴之

本発表では、文学を読む際に生起する情意が学習者の第2言語習得にどう関わるのかを理論的に考察する。まず、文学の情意を *evaluative feelings*、*narrative feelings*、*aesthetic feelings*、*self-modifying feelings* に下位分類する。そして、これらは、インプット処理の継続 (*evaluative feelings*)、処理深度の深い情報処理 (*narrative feelings*)、言語形式の意識化や再構築、そして形式と意味のマッピング (*aesthetic feelings*)、一人の人間である第2言語話者としての資質の向上 (*self-modifying feelings*) という点において、第2言語習得に関わるということを理論的に考察する。そして、こういった意味で第2言語習得を促す機会を学習者に与えるものとして文学教材を位置づける。

キーワード：文学を使った英語教育、第2言語習得、情意、文学的読解

1. はじめに

学習者の第2言語習得における文学の意義は長い間議論されてきた。以前の研究は、研究者の主観や体験に偏重したものが多かったが、現在では第2言語習得論の議論に立脚した研究が徐々に現れている (e.g., Hanauer, 2001)。これらの新しい研究は、第2言語習得と文学を読む際の情報処理法 (文学的読解) の関係について考察している。文学的読解とは、自動的な言語処理が妨げられることによって読者が驚きを感じた後、その非自動化を意味あるものとして捉え、弱い暗意に多くアクセスしながら解釈を試みることで、テキストの意味理解を深める情報処理法である。そして、文学は学習者に文学的読解を生じさせやすいインプットとして位置づけられている。

しかし、これらの研究は文学的読解の認知面しか考慮していない (Mattix, 2002)。文学的読解において本質的な役割を担う情意面が学習者の第2言語習得にどのように関係するかは考察されていない。教師は文学教材を扱う際、学習者の情意に訴えるような発問 (例えば作者や登場人物の心情を問うような発問) をする。このような発問は、教材を理解する上では間違いなく大切である。しかし、学習者の第2言語習得を促すという目的を考えた場合、その発問 (またはその発問により生起を意図される情意) はどのような意味を持つのかは考察されてきていないのである。英語教育の最も重要な目的の1つは学習者の第2言語習得を促すことであり、個々の教材はその目的を達成するためのステッ

プである。したがって、学習者の第2言語習得という目的を見据えた上で、それぞれの教材を位置づけなければならない。このことを行わないと、文学教材を使った指導は教師の自己満足に終わってしまう危険がある。

本発表の目的は、(1) 文学的読解で学習者に生起する情意の整理、(2) 生起する情意と第2言語習得の関係の理論的考察、(3) 情意面を考慮した上での文学の第2言語習得における位置づけ、の3点である。

2. 情意の種類

神経科学における情意研究の発達に伴い、特にここ10年間、文学的読解における情意の役割について実証的に調べられてきた。文学的読解に伴う情意の分類は様々に試みられてきたが、最も包括的な分類を示したと考えられるのが Miall and Kuiken (2002) であろう。彼らは、文学に関わる情意を大きく4つに分類した。それらは、*evaluative feelings*、*narrative feelings*、*aesthetic feelings*、*self-modifying feelings* である。これらは、あらゆる情報処理に関わるが、特に後者3つの情意は文学的読解で最も盛んに生起する。

Evaluative feelings は、あるテキストの読みに対する読者の評価である。読者には読みの最中に様々な情意が生起する。読者は、読みの目的を念頭に置いた上で、生起した情意を総合的に評価し、つまらないと感じれば読解をやめ、夢中になれば更に読み続ける。つまり、*evaluative feelings* は読解、言いかえれば意味理解の継続に関わっている。

Narrative feelings は、テキスト内に展開される虚構世界の中での登場人物や出来事について誘発される情意である。言い換えれば、narrative feelings とはテキストの内容に伴う情意である。narrative feelings は、テキスト理解においては中心的な役割を担うものと考えられている。この情意には、出来事や登場人物に対する sympathy、登場人物とともに分かち合う empathy が該当する。sympathy は、読者が登場人物を第三者的に見ているときに生じるのに対し、empathy は、読者が登場人物と一体化したときに生じる。

Aesthetic feelings は、読者があるテキストを読んでいる最中に会う、言語的技術に対する情意である。例えば、ある表現をみて、面白いと感じることなどが該当する。つまり、テキストの形式面に誘発される情意である。

Self-modifying feelings とは、読者の自己を再構築する情意である。文学は学習者の人格成長を促すということは以前から述べられてきたことである。読者はテキストを読み、主人公の生き様などに触れることで、自己を相対的にみる。そして、既成の自己の殻を打ち破り、更なる発達を遂げるのである。つまり、自分自身を省察することにより生起する情意である。

3.4 つの情意と第2言語習得の関係

Evaluative feelings は、読解、つまり意味理解の継続に関わるものであった。第2言語習得のためには、学習者は多量のインプットを必要とする。この情意は、学習者のインプット処理の継続に関わると考えられる。

Narrative feelings は、テキストの内容理解に関する情意であった。この情意は学習者に能動的な意味理解を促す。山田(2001)が述べるように、目標言語のメンタルレキシコンが形成されるには、処理深度の深い情報処理がなされる必要がある。学習者は虚構世界の中に入り込み、深度の深い情報処理を促進されると考えられる。

Aesthetic feelings は、テキストの形式面に関する情意であった。この情意は、学習者の言語形式の意識化を促す。学習者は言語形式それ自体に興味をもって接し、言語形式に今まで気づかなかった一面を発見したり、なぜこのような表

現が選択されたのかを内容と結びつけて考える。これは学習者の言語知識の再構築や、言語形式と意味のマッピングの促進が期待される。

Self-modifying feelings は、学習者自身の内省、自己理解、自己発達に関わる情意であった。一人の第2言語話者として学習者が向上するには、目標言語それ自体と学習者自身を両方高めていかなければならない。Humanistic approach によれば、こうすることで学習者の自己表現欲求が高まり、第2言語を使った人間としてのコミュニケーションが可能となるのである。この情意は、一人の人間である第2言語話者としての資質を高めるきっかけを提供すると考えられる。

4. 結論

以上の考察から、文学的読解の情意面を考慮した場合、文学教材は、インプット処理の継続(evaluative feelings)、処理深度の深い情報処理(narrative feelings)、言語形式の意識化や再構築、そして形式と意味のマッピング(aesthetic feelings)、一人の人間である第2言語話者としての資質の向上(self-modifying feelings)を促す機会を提供する教材と位置づけられよう。また、情意はお互いに関係し合うことが考えられるため、学習者の第2言語習得を有機的に促進すると考えられる。そして、文学教材を扱う際に教師が学習者の情意に訴えるような指導や発問をすることは、その教材の彼らの理解を高め、ひいては上に挙げたような意味で第2言語習得を促すことになるのである。

引用文献

- Hanauer, D. (2001). The task of poetry reading and second language acquisition. *Applied Linguistics*, 22 (3), 295-323.
- Mattix, M. (2002). The pleasure of poetry reading and second language learning: A response to David Hanauer. *Applied Linguistics*, 23 (4), 515-518.
- Miall, D. and Kuiken, D. (2002). A feeling for fiction: Becoming what we behold. *Poetics*, 30 (4), 221-241.
- 山田純. (2001). 「意味処理深度の英語メンタルレキシコン形成への効果」. 『英語教育研究』. 44, 12-18.

